伏羲の畫卦說に就いて

小島政雄

易を研究する上に於て將又占筮を行ふ上に於て缺くべからざるものはその卦に對する觀念である。易の卦は支那哲學史の上に於て古から存在してゐる陰陽の概念を基調とするもので八卦及び六十四卦の二種に區別せられる。易に於いては特に陰陽の概念を表現するに一種の象徵的符號を用ひる。之を陰爻 ⚋ 陽爻 ⚊ といふ。八卦はこの陰陽兩爻を根本要素とし上下に順次三爻づゝ重ねて組織したもので其の數は二の三乘冪卽ち八となる。故に之を八卦といふ。六十四卦は更に其の八卦を構成の要素とし、各二個づゝ採擇重疊したもので其の凡ての場合を網羅してゐるから八の二乘冪卽ち六十四種となる。而して六十四卦はその構成の方法上より特に之を重卦と名づけることもある。

易といふ名に對し鄭玄は易緯乾鑿度の說を繼承して簡易變易不易の三義を含む（周易正義序所引）と言つてゐるが此の說明は少なくとも其の原始的な解釋ではないと考へる。由來易は占筮の書として作られたもので秦火にも其の爲に難を免れたと傳へられるが後世に至るに從ひ學者は必ずしも之を占筮の書としてのみ取扱はず亦哲學的道德的にも解釋利用するに至つた。かの十翼の如きは其の間の代表的な易學上の產物で夙に歐陽修等の論ずるが如く決して一定の理念の下に一人の手で撰せられたものではない。易の解釋に對する觀點が多岐に涉るに從ひ其の解釋の內容が統一なき多樣性となり、更に進んでは矛盾をも包含し

ながら擴大されて行くことは當然の勢である。鄭玄の所謂變易と不易とは論理的には兩立し得ない矛盾概念である。然るに繫辭傳には夫乾確然示人易矣、夫坤隤然示人簡矣、といひ易則易知、簡則易從といひ又爲道也屢遷、變動不居、周流六虛、上下無常、剛柔相易、不可爲典要、といひ、或は天尊地卑、乾坤定矣、卑高以陳、貴賤位矣、動靜有常、剛柔斷矣、ともあつてさながら鄭玄の說を實證してゐるが如く見ゆるけれども全く如上の消息により繫辭傳が其の命名の本義を忘却し勝手な解釋を試みたものである。易の原始的な意味はやはり變易の意味でないかと考へられる。先秦時代の文獻では易字は變化の意味に用ひられてゐるのが普通になつてゐる。左傳國語に表はれてゐる占筮記事は最も古い筮法を傳へたものと思はれるが遇某卦之某卦と云ふのが最も多い。これは其の筮法が六十四卦を基礎とし繫辭傳に述べられてゐる如き揲蓍法により卦を畫し老陰老陽變化往來の原理により吉凶を占つたものである。易とはかゝる筮法上の特性に就いて名づけられたものであらう。果して然らば易なる名稱の發生した時には既に六十四卦は存在したものと推定しなければならない。從つて八卦及び六十四卦の作者並びに其の年代を究明することが出來ればそれはやがて易の製作年代の推定にも重要な契機を與へることになり、易研究上興味多き問題を提供することになる。然れども此の問題に關する資料的文獻は極めて少く從つて文獻的考證は殆ど絕望の姿である。私は唯次にいさゝか古來行はれてゐる畫卦重卦說を整理し、更に卑見を加へて一試論を陳し以て大方の叱正を仰ぎたいと思つてゐる。

易の八卦及び六十四卦の作者に就いては古來幾多の人々によつて種々の異說が行はれてゐるが要するに伏羲によつて創始せられ卦爻辭以前に完成してゐたとする點に於ては概ね一致してゐる。今其の諸說

を分類すると大要左の二種に分れる。

第一類　周禮が未だ世に紹介せられぬ以前に行はれた說で主として周易に於ける八卦六十四卦の製作者を論ずるもの。

a　八卦六十四卦の作者を同一人即ち伏羲とする說。

古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情、作結繩而爲罔罟、以佃以漁、蓋取諸離、繫辭傳

八卦成列、象在其中矣、因而重之、爻在其中矣。繫辭傳

今易之乾坤足窮道通意也、八卦可以識吉凶知禍福矣、然而伏羲爲之六十四變、周室增以六爻、所以原測淑淸之道而攘逐萬物之祖也、淮南子要略訓

b　八卦六十四卦の作者を別人とし、八卦は伏羲の作、六十四卦は神農或は文王の作とする說。

イ　神農重卦說　京房說

京氏易積算法引、夫子曰、八卦因伏羲、曁于神農、重乎八純、聖理玄微、易道難究云々、困學紀聞卷一所引

ロ　文王重卦說　司馬遷

西伯蓋卽位五十年、其囚羑里、蓋益易之八卦爲六十四卦。史記周本記

垂皇策者羲、益卦演德者文云々、易乾鑿度

第二類　周禮が世に喧傳されて後に行はれた說で、連山歸藏周易の八卦及び六十四卦を各、別人の作と

するもの。是は周禮春官太卜の記事なる

掌三易之法一曰連山、二曰歸藏、三曰周易、其經卦者皆八、其別六十有四、

を如何に註釋すべきかによつて起つた諸說と思はれる。

杜子春云、連山宓戲、歸藏黃帝。（鄭注周禮春官太卜之條所レ引）

伏羲氏得二河圖一、夏后因レ之、曰二連山一、……黃帝氏得二河圖一商人因レ之、曰歸藏一、（山海經、經義考連山歸藏レ之部所引）

古者烈山氏之王得二河圖一、夏后因レ之、曰二連山一、烈山氏之王得二河圖一、殷人因レ之曰二歸藏一、伏羲氏之王得二河圖一、周人曰二周易一、其經卦皆六十四、（王充論衡正說篇）

鄭玄易贊及易論云、夏曰連山、殷曰歸藏、周曰周易、（孔穎達周易正義序所レ引）

其の說く所必ずしも同一でないが、三易の八卦六十四卦は各、伏羲神農黃帝等古代聖人の製作に係るものなりとの主張に於いて大體一致する。

之に因つて見れば周禮の再現(?)を機會として畫卦重卦說は著しい變化を起したのである。即ち出現以前は單に周易の卦に就いてのみ行はれたのであるが、出現以後に至つては周禮の記事と調和を保つため易の畫卦重卦說は三元的混亂に陷つたのである。爾來近世に至るまで甲論乙駁今に其の歸一する所を知らないが、要するに此等の諸說は漢代以前に發生したる傳說或は臆說中の一を祖述し如何にして之を文獻的に合理化せんかの努力であつて未だ傳說或は臆說そのものを吟味せんとする批判的對度には出なかつたのである。從つて古來行はれる幾多の畫卦重卦說は一括して之を前述の漢代以前の數說に還元することが出來るわけである。孔隸達の周易正義序第二論二重卦之人一によれば尙前述の外に夏禹の重卦說

が晉の孫盛によつて稱へられたことを述べてゐるが、經義考によつて檢するに孫盛一人の說で他に之に贊するものが見えないから且らく之を省くことゝする。

次に如上第一第二類の諸說に對していさゝか考察を加へたい。便宜上第二類から吟味することにする。第二類に屬する即ち周禮の記事を前提とする畫卦重卦說は周禮そのものゝ眞疑如何によつて其の價値が評價せられるわけである。周禮は古來群疑の府となつて居るもので、其の作者は普通周公と云はれてゐる賈公彥序周禮興廢が今は殆ど信ずるものが無い。故林泰輔博士は周官制作時代考に於て西周末の作と推定されてゐるが、左傳を除く外先秦の文獻に絕えて其の名すら發見し得ないのは甚だ注意すべきことである。その世に見はれたのは漢の武帝の時で林博士の說に從へば西周末より約六百年の間は所謂山巖屋壁に埋もれてゐたことになる。近時燕京大學の錢穆氏は周官著作時代考なる論文を公にし燕京學報第十一期林博士の所說をも再吟味し、博引旁證以て其の年代を戰國末期より秦漢の際に涉ると論じてゐる。而して更に周禮に於ける諸種の整然たる官制は必ずしも實際に行はれたものでなく多くは學者好事家の想像空案に出でたるものと主張してゐる。周禮が徒らに記述的形式美に走り繁冗瑣屑の文を弄してゐることは明かなる事實であり、其の記事を以て直ちに歷史的事實と認め難いことは何人も肯定することであらう。從つて私は此に問題の中心となつてゐる周禮春官太卜の記事連山歸藏に對しては自ら下に掲ぐる諸說に贊意を表し、二易の存在を否定し又今日傳はるものは隋唐間の僞作と信ずるものである。

胡應麟曰、連山易十卷、見唐藝文志、按班氏六經首周易、凡夏商之易絕不聞、隋牛弘購得寓內遺書、至三十七萬卷、魏元成等修隋史普梁以降亡逸篇名無不具載、皆不聞所謂連山者、而至唐

始出、可乎、北史劉炫傳、隋文搜訪圖籍、炫因僞造連山及魯史記上之、馬端臨據此以爲炫作、或有然者、蓋炫後事發除名、故隋志不錄、而其書尙傳於後、開元中盛集羣書仍入禁中爾。（經義考 卷二）

黃宗炎曰、桓譚謂、連山八萬言歸藏四千三百言、是殷書與周易等、夏之文字幾二十倍於周文王周公之辭、豈古昔之方冊乎、爲此說者、亦不明古今之通義矣、（同 斷）

顧炎武曰、連山歸藏非易也、而周官云三易者、後人因易之名以名之也、猶之墨子言周之春秋・燕之春秋・宋之春秋・齊之春秋、周燕齊宋之史、非必皆春秋也、而云春秋者、因魯史之名以名之也、（同 斷）

且伏羲黃帝は文獻に徵すれば莊子以前の古書には出てゐない。而して黃帝は五行思想の神格化されたものと言はれ、伏羲も後說する如く莊子に至つて始めて唱へられた想像上の聖人と思はれるから戰國中期以後の思想的產物とすべきで杜子春・山海經の說は此に時代錯互に陷るわけである。且經義考に引用せる山海經の文は浙江書局覆刻版には見えない。而して其の所謂河圖なるものも今日存するものは唐宋時代の道家の作に出たものであり、古に於けるものも必ずしも易の卦とは關係なく寧ろ古代の地圖の如きものであらうと主張するものもあつて山海經論衡等の如く、簡單に之を易に關係つけることは不可能である。要之、此等の諸說は周禮の記事を信ずるもの、彌縫策で既に連山歸藏易を信じない私にとつては價値のないものである。

次に第一類の諸說の檢討に入るのであるが便宜上先づ三說發生の時代的順序を考へたい。勿論その正確なる年代は不明であるから、假りに其の撰者或は中心人物の沒年を以て比較すれば左の如くである。

京　房（B.C. 77—B.C. 37）　燕京學報第七期　錢穆氏の劉向歆父子年譜による。

司馬遷（B.C. 145—B.C. 85）　梁啓超氏要籍解題及其讀法史記の部。

淮南王安の自殺（B.C. 122）

即ちbの文王重卦說は神農重卦說より古くaの伏羲畫卦重卦說は文王重卦說より更に稍、古いことになる。唯繫辭傳の著作年代は全く不明であるが楊樹達の周易古義によれば司馬遷が師事して春秋を受けたと稱せられる董仲舒の對策中に既に繫辭傳の文が引用せられ、又董仲舒より稍先輩と思はれる韓嬰の韓詩外傳中にも同じく其の引用文が見えてゐる。更に遡つて漢の高祖が創業の際に之に仕へた陸賈の著と稱せられる新語中にも繫辭傳の引用文が二つ程見え（辨惑篇 明誡篇）又繫辭の文を敷衍したと考へらるべき道基篇等もあるから漢初（B.C. 200年頃）には既に繫辭傳が存在したものと思はれる。何れにしても以上の諸說中尤も古きものとなる。

翻つて各畫卦重卦說を考へるに史記の說は其の典據を繫辭傳に仰いだものと思はれる。即ち繫辭傳に

易之興也、其於中古乎、作易者其有憂患乎、

易之興也其當殷之末世、周盛德邪、當文王與紂之事邪、

とあるのが之である。淸の崔述も

近世說周易者、皆以彖詞爲文王作、爻詞爲周公作、朱子本義亦然、余按傳前章云、易之興也、其於中古乎、作易者夫有憂患乎、初未嘗言中古爲何時、而憂患爲何時也、至此章始言其作於文王時、然未嘗言爲文王所自作也、且曰其當曰其有曰邪曰乎、皆爲疑詞、而不敢決、則是作傳者但就其文推度之、尙不敢決言其時世、況能決知其爲何人之書乎、至司馬氏作史記、因傳此文

遂附會之以爲文王羑里所演、是以周本紀云、西伯之囚羑里、蓋益易之八卦爲六十四卦、自序亦云、西伯拘羑里演周易云々、（豐鎬考信錄卷五）

と同樣な意見を述べてゐる。

次に淮南子の伏羲重卦說も亦繫辭傳に基づくものでないかと想像せられる。繫辭傳に於いては伏羲の重卦說は明言してゐないけれども、作結繩而爲網罟、以佃以漁、蓋取諸離といつてゐる。離の卦は六十四卦の一で、之は即ち伏羲の時既に六十四卦の存在したことを物語つてゐるものである。淮南子はたゞ之を明言しただけのことである。

京房の神農重卦說は今の所その典據を見出し得ないが繫辭傳によれば神農は伏羲に次ぐ支那文化史上の有功者であり、既に孟子に其の名が現はれ爾後屢〻各種の文獻に散見してゐる。蓋し農耕を主とする漢民族間に農業神に對する信仰が早くより出現するは當然の事であり其の崇敬の度の淺からざるも亦必然の事である。漢書藝文志によれば人更三聖世歷三古等の語があり易を成るべく多數の古聖人に關係づけようとする傾向の存在したことも想像せられるから、京房の此の說は繫辭傳の暗示をうけ史記の文王重卦說に對する一異說と見るべきであらう。此等の臆測にして幸に大過なかつたならば、以上の重卦說は何れも源を繫辭傳に發してゐると云ふことが出來る。既に典據が繫辭傳に存するものとすれば凡て之を淸算して繫辭傳の伏羲畫卦重卦說に歸一せしめることが出來るわけである。此の意味に於いて孔穎達の周易正義序に

然重卦之人、諸儒不同、凡有四說、王輔嗣等以爲伏羲畫卦、鄭玄之徒以爲神農重卦、孫盛以爲

夏禹重卦、史遷等以爲文王重卦、其言夏禹及文王重卦者、案繫辭神農之時、已有蓋取益與噬嗑、以此論之、不攻自破、其言神農重卦亦未爲得、今以諸文驗之、案說卦云、昔者聖人之作易也、幽贊於神明而生蓍、凡言作者創造之謂也、神農以後便是述修不可謂之作也、則幽贊用蓍謂伏犧矣、故乾鑿度云、垂皇策者犧、上繫論用蓍云、四營而成易、十有八變而成卦、既言聖人作易、十八變成卦明用蓍在六爻之後、非三畫之後、伏羲用蓍、即伏犧已重卦矣、說卦又云、昔者聖人之作易也、將以順性命之理、是以立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義、兼三才而兩之、故易六畫而成卦、既言聖人作易、兼三才而兩之又非神農始重卦矣、又上繫云、易有聖人之道四焉、以言者尚其辭、以動者尚其變、以制器者尚其象、以卜筮者尚其占、此之四事在六爻之後、何者三畫之時未有象繇、不得有尚其辭、因而重之始有變動、三畫不動、不得有尚其變揲蓍布爻、方用之卜筮、蓍起六爻之後、三畫不得有尚其占、自然中間以制器者尚其象、亦非三畫之時、今伏犧結繩而爲網罟、則是制器、明伏犧已重卦矣、又周禮小史掌三皇五帝之書、明三皇已有書也、下繫云、上古結繩而治、後世之聖人、易之以書契、蓋取諸夬、既象夬卦而造書契、伏犧有書契、則有夫卦矣、故孔安國書序云、古者伏犧氏之王天下也、始畫八卦造書契以代結繩之政、又曰伏犧神農黃帝之書、謂之三墳是也、又八卦小成、爻象未備、重三成、六能事畢矣、若言重卦起自神農、其爲功豈比繫辭而已哉、何因易緯等數所歷三聖、但云伏犧文王孔子、竟不及神農、明神農但有蓋取諸益不重卦矣、故今依王輔嗣以伏犧既畫八卦即自重爲六十四卦爲得其實云々。第二、論重卦之人。

と論じ伏犧が八卦を畫し更に六十四卦を重ねたりと斷じたのは文献による限り妥當な說と云はねばならない。抑、八卦は六十四卦構成の要素として又周易の筮法に於ける判斷上の單位として其の存在の意義を有するもので、それ自身孤立しては筮法上の存在の意義を考へ得られない。前述の如く左傳國語に見える易は餘程古形のものであらうが、既に六十四卦の卦名が現はれてゐる。此の意味に於ても孔穎達が八卦六十四卦を同一人の手に成つたものと主張することは當を得たものである。

然らば畫卦重卦が伏犧によつてなされたとする繫辭傳の說は果して事實として信賴し得べきものなりや否や。私は此の檢討に入るに前だち順序として繫辭傳製作年代の上限を蓋然的ながら推定せねばならない。前述の如く繫辭傳を引用せる文献は漢代以後のものに限られてゐる。唯思想上に於いて繫辭傳と類似せるものは呂氏春秋荀子等に屢〻見られる。今左にその二三を擧げれば

天生陰陽寒暑燥濕、四時之化、萬物之變、莫不爲利、聖人察陰陽之宜、辨萬物之利、以便生、故精神安平形、而長壽得長焉、云々。呂氏春秋 盡數篇

音樂之所由來者遠矣、生於度量、本於太一、太一出兩儀、兩儀出陰陽、陰陽變化、一上一下、合而成章、渾々沌々、離則復合、合則復離、是謂天常、天地車輪、終則復始、極則復反、莫不咸當、日月星辰、或疾或徐、日月不同、以盡其行、四時代興、或暑或寒、或短或長、或柔或剛、萬物所出、造於太一、化於陰陽云々。同 大樂篇

上察於天、下錯於地、塞滿天地之間、加施萬物之上、微而明短而長、狹而廣、神大博大、以至約、故曰一與一、是爲人者、謂之聖人。荀子 王制篇

天地以合、日月以明、四時以序、星辰以行、江河以流、萬物以昌云々。同　禮論

列星隨施、日月遞炤、四時交御、陰陽大化、風雨博施、萬物各得其和以生、各得其養以成、不見其事、而見其功、其是之謂神、皆知其所以成、莫知其無形夫是之謂天功、唯聖人爲不求知天云々。同　天論

かく呂氏春秋荀子等が天地日月陰陽等の運行變化を說き聖人の道と相關的な說明を試み或は太一陰陽等の本體論に言及してゐる所は繫辭傳と甚だしく相類似するものと云ふべきである。而して繫辭傳の文は兩者より洗練の度を加へて居り統一を持つてゐる。恐らくは繫辭傳は呂氏春秋荀子等に後れて著作されたもので兩者は繫辭傳の思想的母體をなすものであらう。もし此の推定にして認められるならば繫辭傳は呂氏春秋以後漢初に到る間の著作と推定し得べきである。

伏犧の畫卦重卦說は文獻に徵する限り繫辭傳の創說で典據のそれと認むべきものがない。尤も緯書の中には屢〻伏犧畫卦說が見えてゐる。たとへば

伏犧德合上下、天應以鳥獸文章、地應以河圖洛書、伏犧則而象之（禮緯含文嘉）垂皇策者犧（易緯乾鑿度）

の如きこれである。然れども緯書は其の起源が不明で漢書藝文志には其の目錄を揭載してゐない。諸橋先生の御說によれば儒敎の典籍を經と呼ぶやうになつたのは秦漢以後との事であるが、果して然らば所謂必有經而後有緯で經書に對する緯書であらうから先秦以前に緯書が存在したとは考へられない。蓋し哀平の間に出て後漢に至つて隆盛を極めたといふのが妥當な說であらう。從つて繫辭傳の典據とは決して成り得ない。繫辭傳によれば支那文化の起源は多く之を易の卦によつて說明してゐる。易の卦が果

してかゝる文化的意義を有するものなるか否かは別として少くとも太古より漢民族によつてかく思惟されてゐたものとすれば、易の製作は所謂則此乃當時大事、千古異祥であるべく繫辭傳以前の古文献に於いて易の畫卦重卦説に關する記事が相當多く散見して然るべきである。然るに事實は之と全く反對である。是繫辭傳の畫卦説が漢民族間に存した民間傳承を記錄したものでなく繫辭傳の創説と推定する理由の一である。

獨り伏犧の畫卦重卦説が古文献に見えざるのみならず單に伏犧そのものの傳説的記述も文献上では莊子楚辭以前に遡ることは出來ない。楚辭に於いては景差の作と稱せられる大招に表はれるものが唯一つやや古いものと思はれるが、敍述が簡單で參考資料にはならない。莊子に於ては伏犧は伏戲に作つてゐる。武内義雄博士の説によれば今本莊子は西紀前三〇〇年前後より漢初に渉る百數十年間の著作に係るものとのことである。老子と莊子　而して伏戲に關する記事は其の最も初期の著作と言はれる内篇人間生大宗師等より中期の著作田子法胠篋篇を經て最も末期の著作たる繕性編に渉つて見えてゐる。今左に二三を擧ぐれば

夫道有情有信、無爲無形、可傳而不可受、可得而不可見、自本自根、自古以固存、神鬼神帝、生天生地、在太極之先而不爲高、在六極之下而不爲深、先天地而不爲久、長於上古而不爲老、豨韋氏得之以挈天地、伏戲得之以襲氣母云々。大宗師

子獨不知至德之世乎、昔者容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊廬氏、祝融氏、伏戲氏、神農氏、當此時也、民結繩而用之、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、鄰

國相望、雞狗之音相聞、民至老死而不相往來、若此之時則至治已、胠篋篇

古之人在混芒之中、與一世而得澹漠焉、當是時也、陰陽和靜、鬼神不擾、四時得節、萬物不傷、羣生不夭、雖有知無所用之、此之謂至一、當是時也、莫之爲而常自然、逮德下衰及燧人伏戲始爲天下、是故順而不一。繕性篇

以上各篇の中繕性篇は漢代の作といへばしばらく措くことゝし、大宗師・胠篋篇の記事を比較するに必ずしも一致しないが大體に於いて伏戲が道を體得せる古代の聖王であり莊子の理想とする自然無爲の法によつて萬民を治平したものたることは共通してゐる。莊子は古來寓言に富み怪を志せるものと稱せられるが伏戲に關する記事も或は此の類に屬するものでないかと推測される。即ちその理想的人物に擬せられてゐること、莊子以外の先秦の文獻に伏戲の記事の殆ど無いこと等は之を裏書するものである。由來支那の文獻には後世に降るに從つて聖人の上に聖人を求め、所謂屋上屋を架する傾向がある。莊子に於ける伏戲其の他の聖人も儒墨兩家が堯舜禹湯以下の聖人を理想とするに相對峙したるものではあるまいか。清の崔述も

余按春秋傳國語最好稱引上古事、然亦但述黃炎以後、未有稱羲農者也、獨易傳以易故、言及於羲農耳、孟子書中有許行爲神農之言、而莊子楚辭、尤多稱引黃帝以前者、然則此等語言、皆當在戰國以後、蓋此時楊墨盛行、楊氏疾儒者之禮法刑政、而矜言無爲之化、墨氏惡當時之厚斂奢用、而欲敦檢樸之風、故好稱述上古君臣、以求加於三代之法、大抵皆寓言之類、不可以爲實者也。崔東壁遺書補上古考信錄

といつて居る。かく考へる時は伏戲そのものゝ傳說的記事も莊子以後に於いて創說せられたことゝな

る。而して莊子に於ては伏戲と易との關係に就いては何等言及してゐないのである。これ伏犧畫卦說が繫辭傳の創說とする第二の理由である。

次に八畫六十四卦の根本要素たる卦爻が陰陽思想を象徵化したるものなることは前說の通である。陰陽思想の發達に就いては未だ十分なる研究が公にされてゐないが、私のしらべた範圍では其の發生は戰國末期であり哲學的概念に迄進化したのは秦代以後でないかと思はれる。而してこの陰陽思想が象徵化され易の卦爻として利用せられる迄には相當の年所と思想的錬磨とを經ねばならぬはづである。從つて易の卦の製作そのものも世人の考へる如く悠遠の古に遡ることは出來ないことゝなる。これ伏儀の畫卦說は繫辭傳の創說なりとする第三の理由である。

以上の理由によつて私は伏羲畫卦重卦說が繫辭傳の創說で支那古來の民間傳承の記錄でないと信ずるものである。然らば繫辭傳が何故に伏羲と易の畫卦說とを附會したかが殘された問題である。此に私は秦漢の際に於ける時代思想を顧みなければならない。抑、秦漢の交に於いて黃老の思想が流行したことは史家の等しく認める所で、呂氏春秋・禮記・淮南子等を一讀すれば思半ばに過ぎるものがある。史記太史公自序によると當時の諸家を品隲すること、儒家は褒貶相半ばするに反し道家に對しては口を極めて賞讃の辭を費してゐる。曹參・陳平・汲黯・田叔等は爲政家にして黃老無爲の治を喜んでゐる。勢が此の如くであるから黃老思想の淵源をなす莊子の思想の尊ばれるのは當然のことである。繫辭傳の作者が易の起源を以て悠遠の古に置き替へんとし且之によつて易を神祕化せんとする考があつたとすれば、莊子に於ける傳說的聖王中最も此の條件を滿すに適當な人物に附會せんとすることも亦自然の數である。而して此の

選に當つたものが即ち伏犧であるまいか。易は其の性質上或は實際運用上の要求から亦かゝる附會が必要であつたのかも知れない。之の推測にして幸に大過なかつたならば繫辭傳の包犧始作二八卦一云々の說は古來の易學者一流の私情に煩はされることがなければ次の如く平凡に解釋さるべきである。即ち繫辭傳の著作されたる秦漢の際を遡る或時代に於いて或人が八卦を畫し同時に六十四卦を重ねたものである。もし繫辭傳の如く八卦を畫したる人を聖人と稱するを得べくんば或人は聖人といふ尊嚴なる文字に置替へらるることゝなる。而して其の或時代とは陰陽思想發達の歷史に鑑みて秦代でないかと思つてゐる。尤も現在の卦爻辭の中には隨分古い史實と思はれるものが存在するから卦爻辭そのものは易の卦よりも却つて古いものかも知れない。そして現在の筮法に到る前にも或種の占筮が行はれたことであらう。しかしそれは六十四卦を有し繫辭傳に傳へられるやうな筮法によつたものではあるまい。現在の易の前身をなすものがどんな形のものであつたかに就いては、既に內藤湖南博士の御說が易疑によつて公にせられてゐる。私はその卓見に對し謹んで敬意を表し擱筆する次第である。（漢文學會研究發表手記による）